SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ロンドン・オリンピック開会式に見る「ブリティッシュネス」：マルティカルチュラリズムから「多様なる労働者の結束」へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森野, 聡子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007086

論文（査読論文）

ロンドン・オリンピック開会式に見る「ブリティッシュネス」～マルティカルチュラリズムから「多様なる労働者の結束」へ

From Multicultural to Inclusive: Britishness Staged in the Opening Ceremony of the 2012 London Olympics

森野聡子
Satoko ITO-MORINO
静岡大学情報学部・教授
smorino@inf.shizuoka.ac.jp

論文概要：2012 年 7 月 27 日にロンドンで開催された第 30 回オリンピック大会の開会式では、「驚異の島々」の成り立ちや文化をテーマに 1 時間のアトラクションが演じられた。本来インターナショナルなスポーツ・イベントであるオリンピックで開催国の「ナショナルな」PR が行われるのはなぜかという疑問から、本論ではオリンピズムとナショナリズムの演出という二つの観点から過去の開会式を分析、それを踏まえ、ロンドン大会開会式におけるナショナルな物語の優位に、自爆テロ等を背景にマルティカルチュラリズム批判が続く連合王国における「 多様性の包含 」という政治的メッセージの影響を読み解く。

キーワード：五輪開会式、ネイション、多様性、マルティカルチュラリズム、分断したブリテン

Abstract: The Opening Ceremony of the 2012 London Summer Olympic Games featured a lengthy performance to present the culture and history of Britain, a.k.a, 'the Isles of Wonder.' The Opening Ceremony, with its iconic use of the Olympic Torch, the Anthem, the Flag, and the Oaths, celebrates the universal ideals of Olympism such as the harmonious development of humankind and the global peace. The so-called artistic programme is, in this regard, a strange amalgam of nationalism and Olympism. It exhibits the national identity of the host country in a form of spectacular mass games and artistic performances. At the same time, it is regarded to be an entertaining show to welcome overseas audiences. However, in the case of the 2012 Opening Ceremony, the present study concludes that this epic of Wondrous Britain, tracing her history from pastoral origins, through the Industrial Revolution and up to the age of popular culture was directed more toward domestic than toward foreign audiences. The paper intends to show that the creation-myth of a Once and Future Jerusalem with a diverse working-class was a contextually appropriate narrative in the socio-political climate of a 'Broken Britain' still lingering some seven years after the 7/7 London bombings of 2005.

Keywords: Olympic Opening Ceremony, Nation, Diversity, Multiculturalism, Broken Britain

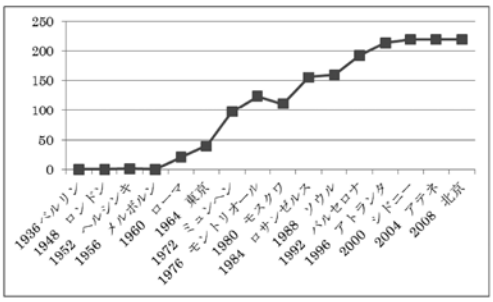
1．はじめに

1.1　オリンピックとテレビ

1948 年ロンドン 1、1972 年ミュンヘン 98、1984 年ロサンゼルス 156。これは、国際オリンピック委員会（International Olympic Committee: 以下 IOC と表記）が公表した、各オリンピックをテレビ放送した国・地域数である。2000 年以来その数は 220 に達し（図 1 参照）、IOC によると、世界の総人口の約 6 割が視聴している計算になる（IOC 2009: 2）。[1]

1.2　オリンピックとナショナリズム

巨大なメディア・スポーツに発展したオリンピック・ビジネスの抱える諸問題については先



（図 1）夏季オリンピック大会のテレビ放送国・地域数[2]（IOC2012a をもとに作成）

行研究に委ねるとして、本論では、ナショナル・アイデンティティ構築・流通の文化的装置としてのオリンピックに焦点を当てたい。

現在、オリンピックに出場する競技者は、「オリンピック憲章」によれば、自分が国籍を有する国・地域のオリンピック委員会（National Olympic Committee: 以下 NOC と表記）からエントリーされなければならない（IOC2011: Rules 40・41）。オリンピック参加を、IOC が認めた「ネイション」（主権国家や地域、詳しくは後述）単位とする取り決めは、1920 年の第 7 回大会（アントワープ）に遡る。[3] 以来、オリンピックは、「より速く、より高く、より強く（*citius, altius, fortius*）」を信条としたアスリート個人の競い合いから、ネイションとネイションの対戦の場へ、さらには、ナショナリズムをめぐる、さまざまな言説や表象が、開催国の国民、そしてグローバルなオーディエンスに向けて「演出」され、消費されていくメディア・イベントへと変貌していったのである。

近代オリンピックに潜在するナショナリズム的性格は、表彰式での国旗掲揚や国歌演奏に端的に見られるし、メダル獲得数を「国別」に集計する慣例や、自国の選手に偏ったメディア報道にも当てはまる。開会式も例外ではない。ネイション別の入場行進（the parade of Nations）における、各国選手団を先導するプラカードの「国名」表示、選手たちの着る民族衣装や「お国柄」を表したユニフォームのデザイン、さらには開催国の文化や伝統をテーマにしたアトラクションなど、今や国や民族の華々しいショーケースだ。

本論は、テレビ時代とともにメディア・イベント化していった開会式の演出を概観、1980 年以降の開会式の特徴を、オリンピズムという「ネイション」を超えた「大きな物語」と、「ネイション」の意識高揚というダブル・メッセージの場として捉えた後、2012 年のロンドン大会開会式における開催国のナショナル・アイデンティティの表象や物語を分析する。

今回の開会式が特別な意味を持つのには理由がある。ブレア政権下、連合王国ではスコットランドとウェールズへの内政権委譲が推進され、1998 年には双方とも自前の議会を獲得、北アイルランドも、同年の「聖金曜日合意」に基づき、アイルランド共和国と協議して「アイルランド全体」の方針を決めていくことが確認された。オリンピックと並ぶグローバルなメガ・スポーツである FIFA フットボール W 杯では、スコットランド・イングランド・ウェールズ・北アイルランドという、連合王国を構成する 4 つのネイションが各自ナショナル・チームを派遣するのが恒例だが、オリンピックでは連合王国が連合チームとして参加する。ロンドン大会は、地方分権の時代になって初めて連合王国がホストを務めるオリンピックである。一方、連合王国は、アジア、アフリカ、カリブ等のエスニック・グループが人口の 20％近くを占める多民族国家でもある。[4] そんな中、デイヴィッド・キャメロン率いる保守党陣営や大衆紙は「分断したブリテン（Broken Britain）」という惹句で危機感を煽り、伝統的家族や共同体の復活を訴えている (*Sun,* 3 March 2010; *BBC News*,15 August 2011)。こうした背景のもと、オリンピックのステージで、連合王国は自己の統一的アイデンティティをどのように定義し語ってみせるのだろうか。

なお、ロンドン大会の開催国は、正式国名である the United Kingdom ではなく Great Britain と表記され（http://www.olympic.org/london-2012-summer-olympics）、入場行進でも Great

Britain の名を掲げている。同様に、オリンピックの参加母体となるオリンピック委員会 NOC は British Olympic Committee であり、ナショナル・チームは Team GB と呼ばれる。本論では、こうした「ネイション」の呼称間の差異を明らかにするために、「イギリス」・「英国」という慣例的表記は排除し、通常の意味での国名としては「連合王国」を、オリンピック内で構築される連合王国のナショナル・アイデンティティを論じる際には「ブリテン」・「ブリティッシュ（ネス）」という用語を用いる。

2. メディア・イベントとしてのオリンピック開会式の歴史

2.1 開会式プロトコール

2012 年 6 月現在、IOC が定める開会式の実施要綱は表 1 のとおりである。1896 年に始まり、ロンドン大会で 30 回目を迎えた近代オリンピック夏季競技大会の開会式が、どのようにして今日のような大イベントに成長してきたのかを以下に概観する。[5]

（表 1）オリンピック開会式の実施要綱（IOC2012b より作成）

1	開催国元首入場
2	開催国の国歌演奏と国旗掲揚
3	選手団の入場行進
4	平和の鳩の放鳥
5	国家元首による開会宣言
6	オリンピック旗の掲揚とオリンピック賛歌演奏
7	選手宣誓
8	審判員宣誓
9	コーチ宣誓
10	聖火の点火
11	芸術プログラム

第 1 回大会の開会式は、アテネのアクロポリスの丘のふもとに新設された 5 万人を収容するパンアテナイ競技場で開催された。式典は、スピロス・サマラス作曲の「オリンピック賛歌 (the Olympic Anthem) 」の合唱、開催国ギリシャの元首ゲオルギウス一世による開会宣言が行われただけで、現在の大がかりな演出に比べると実に簡素なものだった。アテネ大会で披露された「オリンピック賛歌」が IOC で正式に認可され、開会式で「オリンピック旗」の掲揚時に演奏されるようになるのは 1960 年のメキシコ大会からである。

参加チームが「ネイション」名の入ったプラカードと国旗を掲げスタジアムに入ってくる演出は 1908 年の第 4 回大会（ロンドン）から始まり、1928 年第 9 回大会では、オリンピック発祥の地ギリシャがパレードの先頭を、開催国がしんがりを務めるという慣例ができあがった。それ以前はというと、たとえば 1904 年のセントルイス大会に出場したドイツ・チームにスイスやオーストラリア出身の選手が含まれるなど、チームと「ネイション」—「国家」や「国籍」—は必ずしも一致していなかった（Horne and Whannel 2012: 90）。ただし、オリンピックにおける「ネイション」の定義はあいまいで、1908 年大会では、ブリティッシュ・エンパイアの自治領であったオーストラリアとニュージーランドが「オーストレーシア（Australasia）」の名で、一つのチームとして参加している。

現在でもオリンピックは、独自の「世界地図」の上に成立している。IOC 傘下の NOC は 2012 年 7 月時点で 204 ある。国連加盟国 193 のうち、2011 年に独立したばかりの南スーダンを除く 192 カ国が自国の NOC からナショナル・チームを派遣している。残り 12 は、アメリカ領（アメリカ領サモア、グアム、ヴァージン諸島）、連合王国領（バミューダ、ブリティッシュ・ヴァージン諸島、ケイマン諸島）、オランダ領アルバといった欧米諸国の海外領土、そしてクック諸島、台湾（Chinese Taipei）、香港、パレスチナで、いずれも、国際的には独立国家と認められていない「ネイション」を母体としている。[6] このほかにも、1992 年のバルセロナ大会で旧ソビエト連邦に所属していた 7 つの国

が「合同チーム（EUN）」を編成、国旗・国歌の代わりにオリンピック旗とオリンピック賛歌を使用した例がある。また、2000 年と 2004 年には、北朝鮮と大韓民国チームが、競技自体は別参加だったものの、開会式で Korea の名のもと合同入場行進を行い、話題を呼んだ。

このように、オリンピックにおける「ネイション」の概念が国民国家を単位とする国際社会の政治的分節と必ずしも一致しないがゆえに、オリンピックは、グローバル化が叫ばれる時代になっても、ベネディクト・アンダーソン（Anderson 1991）言うところの「想像の共同体」としての「ネイション」が表象として、あるいは物語として生産され、確認されていく場として機能しているのである。

一方、開会式は、オリンピックのインターナショナリズムを表象する記号にも彩られている。1920 年には、五大陸をかたどった五輪マークをつなげて世界の融和を表す「オリンピック旗」の掲揚、そして平和の象徴として鳩を飛ばす演出が採用された。（なお、動物愛護の観点から、1992 年バルセロナ大会を最後に本物の鳩の使用は中止されている。）開催国の選手代表が「スポーツの栄光とチームの名誉のために」参加することをオリンピック旗にかけて誓うという選手宣誓も、この大会で初めて行われた。この後、1972 年には審判による宣誓、2010 年のユース・オリンピックからはコーチによる宣誓が加わり、現時点で開会式における「オリンピック宣誓（the Olympic Oaths）」は 3 つ行われている。

「オリンピックの火」の登場は 1928 年のアムステルダム大会である。以来、開会式でスタジアムに設置された巨大な聖火台に「オリンピックの火」を点火し、開催期間中、大会を守護する「聖火」として灯し続け、閉会式で聖火消灯、オリンピック旗を降納するというセレモニーが粛々と続けられている。

1936 年の第 11 回大会（ベルリン）では、ギリシャはオリンピアで採火された「オリンピックの火」を開催地までリレーで運ぶという「聖火リレー」が行われ、3,000 キロに及ぶ行程はドイツのラジオで実況放送された。聖火リレーは、第二次世界大戦後に再開されたロンドン・オリンピック（1948 年）でも踏襲され、1952 年のヘルシンキ大会より正式に採用、最終ランナーによる聖火点火とともに開会式のクライマックスとなっている。[7]

2.2　1980 ～ 2008 年までの夏季大会開会式の芸術プログラム [8]

現在、採用されている開会式プロトコールの大半は、1980 年代までに整備された。これらの「定番」は、聖火点灯の演出など、大会ごとの趣向はあるものの、それほど変わるものではない。カラー放送が一般化し、ハイビジョン画像が採用され、ライブ映像が世界中に配信されるようになると、メディア・イベントとしての開会式の見所として、かつては「前座」扱いだった、開催国による「芸術プログラム」の比率が俄然大きくなっていた。

1980 年のモスクワ大会開会式はアトラクション長大化のはしりである。ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議したアメリカがボイコットを表明、結果的に 64 の NOC が不参加という異常事態の中で敢行された開会式では、国歌演奏とともに公式プログラムが終わると、1 時間に及ぶ芸術プログラムが延々とくり広げられた。連邦の 15 の共和国のカラフルな民族衣装をまとった舞踊団がロシア民謡「カリンカ」に合わせて踊り、トロイカが疾走し、2 千人の体操選手が集団演技を見せ、大会マスコットの小熊のミーシャが愛嬌を振りまいた後、2 千人のアスリートが人間オリンピックの輪を作った。テレビ向けの演出として、東側スタンドに陣取った 4,500 人が色とりどりのパネルや帽子を使って 174 のモザイク画を式典の間中、次々と披露する「ピクチャースクリーン」も採用された。

1984 年のロサンゼルス大会は、逆に東側諸国が参加をボイコットしたが、開会式では地

元ハリウッドの協力のもと、音楽でアメリカの歴史をつづる30分のミュージカル「ミュージック・オブ・アメリカ」が、独立戦争時のマーチングバンド、ジャズ、ゴスペル、85台のグランドピアノとオーケストラが奏でるガーシュウィンの「ラプソディー・イン・ブルー」、1940年代風のビッグ・バンドなどをくり出して賑やかに演じられた。フィナーレでは、スタンドの観客がカラーパネルを掲げて参加国・地域の旗を作り、式典を盛り上げた。

1988年のソウル大会は、12年ぶりに東西160のNOCが集う大会ということで、「調和と進歩」をスローガンに、式典のテーマはイデオロギー・人種・貧富など「すべてのバリアを超えること」と定められた。同時に、公式レポートによれば、組織委員会は、「韓国文化のオリジナリティ」を色彩豊かに見せて、世界にアピールすることにも顧慮していた。開会式の芸術プログラムは2部構成で、第1部（30分）では、まず韓国の伝統的打楽器が打ち鳴らされ、白いチマチョゴリのダンサーたちが「天女の舞」を舞って「天と地と人」の融合を表した後、WELCOMEの人文字が作られた。選手退場の後に行われた約42分のアトラクションは、人類が誕生した原初の融和を表す踊りから始まり、各国の仮面をつけた演者たちが「混沌」の時代へ突入したことを表した後、1,008人が韓国の伝統競技テコンドー（今回より初めて正式種目に採用）を披露、悪を退散させるという筋書きだ。ラストは、無人となった緑のスタジアムに7歳の少年が宇宙を表す輪に乗って登場、「一つの世界」の新生を寿ぐ祝祭へと変わった。歴代の大会マスコットが集合し、各国の民族舞踊が演じられた後、参加者全員で「ハンド・イン・ハンド」を合唱して終幕となった。

1992年のバルセロナ大会開会式は、カタルーニャの首都バルセロナの「アイデンティティ」を際立出せることを主眼に演出された（Kennett and Moragas 2006: 181）。スタジアムを青いシートで覆い、バルセロナの生んだ世界的建築家アントニオ・ガウディのモザイクが作る波をかき分け、帆船に乗ったギリシャの戦士たちが登場、英雄ヘラクレスによってバルセロナが誕生する神話的物語が「地中海」と題するページェントとして演じられた。

1996年のアトランタ大会でも同様に、開催地の文化・風土をテーマにした「アメリカン・サウス」というオペラ（15分）が「サマータイム」の演奏を皮切りに披露された。500人が演じる蝶と蛍が飛び交う、自然豊かで幻想的な「夏の夜」から始まり、南北戦争による荒廃を経て「南部スピリット」が再生、コーラスが「ハレルヤ」を高らかに歌い上げる。「ジョージア・オン・マイ・マインド」を独唱したグラディス・ナイトをはじめ、ジャズ・バンドや黒人パフォーマーの登場、キング牧師へのトリビュートなど、南部の黒人文化に焦点を当てた構成である。なお、近代オリンピック誕生百周年を記念して、ギリシャ神殿を模したスクリーンに古代五輪競技の様子が影絵で投影されるという演目も行われた。

2000年シドニー大会開会式は、約2時間のパフォーマンスから始まった。白人の少女が海に見立てたスタジアムに現れる。夢の中で巨大なクラゲや熱帯魚が泳ぐ深海へおりていった少女は、先住民アボリジニの長老と出会い、彼に導かれて太古へと遡り、大地の誕生からアボリジニの時代、ヨーロッパ人の到来を経て現代に至るオーストラリアの歩みを目撃する。五輪色をまとった集団が五大陸からの移民を、タップダンサーたちの踏み鳴らす靴音が労働者が作り出す産業社会を表象する。和解のシンボルである「命の橋」がステージに組み立てられた後、出演者全員が集まって色鮮やかな曼陀羅を形作り、少女と長老が空に昇っていく中、シドニー・ブリッジがEternityの文字とともに浮かび上がる。アボリジニ出身のキャシー・フリーマンが聖火最終ランナーを務めるなど、アボリジニとの融和の上に現在のオーストラリアが存在することを強く打ち出した式典演出だった。

2004年のアテネでは、ギリシャの財政難のなか、開会式はシドニーよりはるかに縮小した規模となったが、水をはったスタジアムから大理石の巨大な人頭が浮上し、叡智と芸術の発祥の地としてのギリシャをアレゴリーとして見せるページェントや、スタジアム全体を水時計に見立て、フレスコ画・モザイク・彫刻・絵画から取られた画像に扮したパフォーマーたちがギリシャ神話の世界から近代オリンピックの時代までを活人画として見せる趣向など、25分とコンパクトながら印象深いアトラクションを提供した。ラストシーンでは、妊娠した若い女性が水面に向かって歩いていくと、レーザー光線のDNA螺旋が出現する。ギリシャ国旗を持った少年が紙ボートにのって「エーゲ海」に船出する、式の冒頭場面とつながり、ギリシャから発した文明が現代に継承されていることを暗示する演出だ。

2008年の北京大会は中国が国家の威信をかけて、シドニーを上回る大スペクタクルを準備した。開会式は、開催年にかけて2,008台のドラムによるカウントダウンと、「有朋自遠方来不亦楽乎（朋あり遠方より来る、また楽しからずや）」という孔子の「論語」の一節を全員で詠唱するところから始まり、中国四千年の歴史を一糸乱れぬマスゲームとして見せ、巨大な巻物に書をしたためるパフォーマンスでは、紙と文字という文明の起源が中国にあることを印象付けた。また、中国の56民族を代表する子どもたち56人が中国国旗を持って入場、224人の民族合唱団が国歌を斉唱するなど、多民族国家の団結を強調するシーンもあった。最後は巨大な「地球」が出現、さまざまな国・民族の子どもたち2,008人の写真が掲げられ、大会スローガンである「一つの世界、一つの夢」を表して閉会となった。

2.3　開会式の芸術プログラムの構造

スペクタクル理論からオリンピックを研究しているマカルーン（1988）は、近代オリンピックとは、スペクタクルと祝祭、儀礼、ゲームが絡まり合う独自のパフォーマンスであり、その多肢的（ramified）特徴ゆえに、観る者に自らのオリンピック体験について常に「再帰的な」（reflective）問いかけを課すと述べる。厳粛な儀式として参加した者には「これは純粋に儀式なのか？」と自問自答させ、単なる見世物として楽しもうとした者には逆に儀礼性への感動を与えるような体験を通じて、オリンピックは、この式典が定めるところの社会的帰属単位である「個人」・「ネイション」・「人類」という概念について、4年に一度の定義の再確認を参加者とオーディエンスに促すのだ。本論はマカルーンの図式を正確に踏襲するものではないが、オリンピックが、大会を支える諸概念の再解釈の場であるという彼の主張を念頭に、1980年以来の開会式の構造的特徴をまとめてみたい。

①スペクタクル性：モスクワ、ソウル、北京の開会式で観客を圧倒した、数千人規模のマスゲームや群舞、人間ピラミッドなどは、開会式の持つスペクタクル性の極みである。けれども北京の開会式演出を担当した映画監督チャン・イーモウが、「統制された美を見せる人間パフォーマンスは北朝鮮が一番、中国は二番手だが、西欧にはまねできない」といみじくも発言しているように（Spencer 2008）、マスゲームは完璧であればあるほど、全体主義国家の鉄のレジームを連想させる。一方、そうした国家による専制的支配の印象を和らげるのが、次に述べる、民族色を表に出した「祝祭」の要素である。

②伝統と民族：モスクワ、北京では、ソ連、中国という超大国を構成する多民族が色とりどりの民族衣装をまとって民族舞踊を披露し華やかな祝典シーンを演出するとともに、「多様性の中の団結」を印象付けようとした。開催国の代表的な音楽や踊りをフィーチャーしたパフォーマンスは他の開会式にも共通する。この、いわば「ナショナルな」文化プロ

グラムには、ソウルのように伝統芸能を中心に「韓国の民族文化のユニークさ」を強調したもの、バルセロナとアトランタのように開催地域のローカル・アイデンティティを前面に押し出したものがある。一方、民族文化が持つエキゾティックな魅力だけでなく、自国の文化・伝統を世界的遺産としてアピールしたのが北京である。

③ 再生儀礼：宗教学者のミルチャ・エリアーデは、宗教的儀礼とは、宇宙が始まった「太初のとき」に回帰し、原初の創造行為を再演することで世界が生まれ変わる＜場＞であると定義している（エリアーデ 1969）。バルセロナの開会式では、バルセロナが生まれ出る神話的時間がスタジアムに再現され、同様にアテネの開会式でも人類とヨーロッパ文明、人間の叡智が海という母胎から誕生し、未来へと継承されていく物語が演じられた。シドニーでは、アボリジニの神話的時間である「ドリーム・タイム」を借りて、現代の少女がオーストラリアの誕生から現在までを夢見ることで、多文化・多民族の共生に立脚する「ネイション」として、オーストラリア建国の歴史を読み直して見せた。

世界平和、健全な精神と健全な身体の融合という「大きな物語」[9]をメタ構造に持つオリンピックにおいて、ホスト国の「ナショナルな」アトラクションが開会式で許されるのは、それが本来は、外国の参加者やオーディエンスに向けたエンターテインメントだからだ。そこで演じられる「ネイション」は、観光客用に演出された郷土芸能のような、ゲストが消化しやすいアイコンとステレオタイプの寄せ集めであり、「地元」の観客のまなざしは計算されていなかったはずである。ところが 1980 年以降の芸術プログラムは、自国の「現実」を肯定する内向きの政治的言説へと変容している。黒人や先住民、少数民族にライトを当てる演出は、過去の迫害や現在の対立があたかも存在せず、すべての国民の協調の上に「一つのネイション」があることを印象付ける。[10] けれども、それがオリンピズムという普遍的テーマと難なく融合してしまうゆえに政治的意味は隠蔽され、「一つの世界」を謳う「大きな物語」の「ナショナル」なヴァージョンが各大会で演じられているに過ぎないとの印象を与えてしまう。それが、開会式の持つ最大の政治的レトリックなのだ。

3. ロンドン・オリンピック開会式のプログラム構成

第 30 回夏季オリンピック競技大会開会式は、2012 年 7 月 27 日金曜日 21 時、ロンドンの中心から 10 キロほど東のストラトフォード地区に新設されたオリンピック・スタジアムで行われた。演出を担当したのは映画監督ダニー・ボイルで、式典は 14 のステージから構成されていた。以下、NHK で日本時間 7 月 27 日 4：30 ～ 8：00 にかけて生中継された開会式映像、および大会公式サイトをもとに、ステージごとの内容をかいつまんで紹介する。

3.1 ステージ 1・2 「驚異の島々（The Isles of Wonder)」～「カウントダウン」

スタジアムには田園風景のセットが組まれていた。グラストンベリ・トール（後述）を模した緑の丘のふもとに広がる草原には本物の牧草が敷き詰められ、生きた動物たち―「40 頭の羊、12 頭の馬、3 頭の牝牛、2 頭のヤギ、10 羽のニワトリ、10 羽のアヒル、9 羽の鵞鳥、3 匹の牧羊犬」（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage1）―が放たれている。小川には大きな水車が回り、ピクニックを楽しむ家族、メイポールの回りで踊る子どもたち、農作業に赴く男たちの姿が映される。

続いて「驚異の島々」の映像が流された。テムズ河の源グロスターシャーから河を下ってロンドン市内へと高速カメラでシーンが転換する合い間に、過去のオリンピック映像、ヘンリー・

レガッタ、クリケットの試合、ロンドンの地下鉄、過去のオリンピック・ポスターなどが目まぐるしく挿入される。画面がスタジアムに切り替わったところでライブ映像となり、村の子どもたちが風船を割ってカウントダウンが始まった。アナウンサーの紹介とともに、開会式の5日前にツール・ド・フランスでブリテン初の総合優勝に輝いたブラッドリー・ウィギンズが登場、「オリンピックの鐘」を打ち鳴らし、開会式が開幕した。

3.2 ステージ３・４「緑なす楽しき大地 (Green & Pleasant Land)」～「万魔殿 (Pandemonium)」

地元ロンドンのカトリック系学校の生徒たちが、アカペラで連合王国の4つのネイションを代表する歌を披露した（イングランド以外は、現地で撮影した映像が流された）後、ステージに一台の馬車が登場。トップハットにフロックコートのヴィクトリア朝紳士の一団がおりてくる。先頭は、シェイクスピア俳優ケネス・ブラナー演じるイザムバード・キングダム・ブルネルである。ブルネルは19世紀ブリテンの「鉄道の時代」を代表するエンジニアだ。ブルネルはグラストンベリ・トールに登り、シェイクスピアの『テンペスト』第3幕第2場より「恐れるなかれ、島は騒音でいっぱいだ」という一節を朗読する。

ドラムが一斉に打ち鳴らされる中、グラストンベリ・トールの上に巨大なオークの木がせり上がり、労働者の群れが出現、丘を下っていく。それとともに、ステージは緑の田園風景から、次第に、煙突や溶鉱炉の立ち並ぶ製鉄所へと変わっていく。

場面転換と合わせて、女性参政権運動のデモ隊もスタジアムに行進してくる。二つの世界大戦の犠牲者への黙祷をはさんで再びドラムが打ち鳴らされる中、ビートルズのサージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンドの衣装を着た若者たち、移民の群れ、兵士たちが次々にステージをパレードする。ブリテン社会が20世紀に経験したさまざまな変革を表す場面だ。労働者たちが鉄の輪を作る中、上空から赤々と燃える4つの輪がおりてきて、やがて一つに合わさり、燃え上がるオリンピック・リングから花火が流れ落ちた。

3.3 ステージ５「幸福と栄光を (Happy & Glorious)」

まず映像が流れる。ロンドン名物のタクシー、「ブラック・キャブ」をバッキンガム宮殿に乗り付けて降りてきたのは、タキシード姿のジェイムズ・ボンド（現在のボンド俳優ダニエル・クレイグが演じている）だ。ボンドは宮殿の奥に進み、書斎で書き物をしているエリザベス女王（実物）を待っているが、腕時計をちらちら見ているところから急いでいるらしい。とうとう女王を促し、待機しているヘリコプターへエスコート。途中、地上の人々が、この年在位60周年を迎えた女王陛下を、連合旗を振って歓迎する場面が映し出される。ヘリコプターがオリンピック・スタジアムの上空に到着、二人がダイブするというところで映画は終わり、実際に二人のスタント俳優が連合旗をあしらったパラシュートでスタジアムに降下して見せた。続いて「女王陛下入場」の場内アナウンスとともに、エリザベス女王が夫のエディンバラ公、ジャック・ロゲIOC会長とともにスタジアムに姿を現した。グラストンベリ・トールの中腹に連合旗が掲揚され、連合王国国歌「ゴッド・セイヴ・ザ・クィーン」が、パジャマ姿の子どもたち、実は、耳の不自由な子どもたちで作る「カオス合唱団（the Kaos Signing Choir for Deaf and Hearing Children）」によってアカペラで歌われた。

ちなみに第5ステージの題名は連合王国国歌から取られたもので、このステージで女王入場が行われることは公式プログラムで明示されていたが、女王がボンド・ガールになって登場するという趣向は当日まで伏せられており、翌日

のメディアの見出しを飾った。

3.4 ステージ６「2つ目の角を右へまがって、あとは朝までまっすぐ(Second to the right, and straight on till morning)」

タイトルはJ・M・バリの『ピーター・パン』で、ピーターがウェンディに教えたネヴァーランドへの道筋をもとにしている。このセクションは、大会公式サイトによると「ブリテンの二つの偉大な業績、すなわち児童文学と国民保険サービス（NHS）」へのオマージュである（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage6）。ステージは、グレート・オーモンド・ストリート子ども病院（『ピーター・パン』の印税によって運営されている）の病室となり、子どもたちがベッドをトランポリン代わりに遊んでいる。「ハリー・ポッター」シリーズの作者J・K・ローリングが『ピーター・パン』の一節を朗読、続いて、ブリテンの生んだ世界的なファンタジーに登場する悪役たち、ハートの女王（『不思議の国のアリス』）、フック船長、クルエラ（『101匹わんちゃん』）、ヴォルデモート、そしてチャイルド・キャッチャー（『チキ・チキ・バン・バン』）が巨大な姿で現れ、子どもたちを震え上がらせる。そのとき、空から24人のメアリー・ポピンズがこうもり傘をさして登場、悪役たちを追い払った。子どもたち、メアリー・ポピンズ、病院スタッフが腕を組んで喜びの踊りを踊る。バックで演奏を担当したのは、映画『エクソシスト』のテーマ「チューブラー・ベルズ」で知られるマイク・オールドフィールドである。

3.5 ステージ7・8「間奏曲(Interlude)」～「フランキー＆ジューン、ティムありがとう（frankie & june say... Thanks Tim)」

1924年パリ大会でのブリテン陸上選手の友情と活躍を描き、オリンピック映画の代名詞となった『炎のランナー』（1981）より、アカデミー賞を受賞したテーマ曲がロンドン交響楽団によって演奏された。この場面は「チャップリン以来のブリテン映画の伝統を祝う」（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage7#）ため、現代の人気コメディアン、ローワン・アトキンソン演じるMr. ビーンがコミック・リリーフとして登場した。

間奏曲をはさんで、時代は現代に移る。赤いミニにのった母と息子がステージに登場する。公式サイトによれば、ブリテンの典型的な住宅地で家族が過ごすサタデイナイトを表しているという（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage8#）。両親は家でテレビを見てくつろぎ、ティーンエイジャーの子どもたちはダンスに出かける。続いて、ローリング・ストーンズ、ビートルズ、デイヴィッド・ボウイー、クィーン、セックス・ピストルズら、1960年代以降のブリティッシュ・ロックの名曲が流され、ダンスシーンがくり広げられる。音楽とともに、背景では、チャップリン、『トレインスポッティング』『フォー・ウェディング』など、メイド・イン・ブリテンの映画のクリップも映写される。ジューンとフランキーという二人の若者が携帯電話を通じて恋を発展させるというラブ・ストーリーが平行して進行し、最後は、実際に出会った二人のキス・シーンでハッピー・エンディングとなる。続いてロンドン東部出身のディジー・ラスカルがラップを披露。セクションの最後では、ワールド・ワイド・ウェブの考案者であるティム・バーナーズ＝リーが登場し、ステージ上のコンピュータからツィート、‘this is for everyone’という文章がLEDで会場に映し出された。ダンスホールの生バンドで踊った祖父母の世代から、街中でも好きな曲を携帯で聞いてつながることができる今の若者たち。「人の心をつなぐ」テクノロジーとしてのインターネットの誕生をクライマックスにしたセクションである（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage8#）。

3.6 ステージ９～11 「我がもとにとどまれ (Abide with Me)」～「選手入場 (Welcome)」～「バイク a.m.(Bike a.m.)」

聖火リレーの映像が流れる。タワーブリッジを高速ボートで下ってくるのは、最終ランナーの呼び声も高かったデイヴィッド･ベッカムだ。アトラクションが終わり、開会式のフォーマルなプロトコールが始まる予告である。ステージでは沈み行く太陽を表す群舞､そしてマハトマ･ガンジーが愛したという賛美歌で、沈没するタイタニック号の船上でもオーケストラが演奏していたという「アバイド・ウィズ・ミー」の歌唱にあわせてダンス・パフォーマンスが行われた（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage9）。

次は、いよいよ選手入場である。ペット・ショップ･ボーイズ､ビージーズ､U2 などのポップソングをバックに、204 の NOC チームが入場行進をくり広げた｡旗手の隣では､ボランティアの子どもが、各 NOC の名前を記した銅製の花びらを抱えている。それぞれのネイションの旗がグラストンベリ・トールに次々と立てられて、花びらも、フロアに円を描くように並べられていく。開催国のブリテン・チームのパレードが終わると､イングランド出身の人気バンド､アークティック・モンキーズが演奏を始め、花火が一斉に上がった。次に、ビートルズの「カム・トゥゲザー」とともに、自転車に乗った選手たちが平和の鳩を象徴する LED を使った羽をつけてスタジアムを回った。

3.7 ステージ 12～14「開会宣言 (Let the Games Begin)」～「聖火点火 (There is a Light That Never Goes Out)」～「イン･ジ･エンド (And in the end...)」

セヴァスチャン・コー、ロンドン・オリンピック組織委員会会長、ロゲ IOC 会長のスピーチに続きエリザベス女王が開会を宣言した後、ファンファーレが鳴って花火が打ち上げられた。今回はアスリートではなく、各界から選ばれた「オリンピックの理念を表す」8 人の旗手が｢オリンピック旗｣を持って入場､オリンピック賛歌演奏へと進む。

次はクライマックスの聖火点火である。聖火を運ぶボートがスタジアムの外に到着した映像が流れ、5 大会連続でボートに優勝したスティーヴ・レッドグレイヴがベッカムからトーチを受け取りスタジアムへ向かう。その間、スタジアムでは選手、審判、コーチによる宣誓が行われている。レッドグレイヴはスタジアムに入ってくると、7 人の 10 代の無名アスリートの一人にトーチを手渡した。7 人は代わる代わるトーチを掲げながらスタジアムを一周、かつての金メダリストに迎えられる。大会のスローガンである Inspire a Generation を表象するように新旧のアスリートが抱き合った。その後、一つのトーチが 7 つに分けられ、ステージ中央に置かれた、204 の花びらの一つ一つに点火すると、その炎が中心に向かって広がっていき、一つに集まって大きなオリンピックの火となった。花火が盛大に打ち上げられ、鐘が打ちなさられた。フィナーレは予告どおりポール・マッカートニーが登場､「ヘイ・ジュード」の大合唱とともに約 3 時間 45 分の式典は終演となった。

4. 芸術プログラムに見るブリティッシュネス

4.1 島としてのブリテン

「驚異の島々」という題名だけでなく、アトラクション全体に「島」のイメージがふんだんに盛り込まれている。観客席全体を青いシートで覆ってスタジアムを「島」のように見せる冒頭の演出、ブルネルが引用する『テンペスト』の台詞、ピーター・パンの島ネヴァーランドへの言及、後述するグラストンベリとアヴァロン島との連想など枚挙にいとまない。また、いずれも｢ 楽園 ｣｢ユートピア｣のコノテーション

を持っているのも興味深い。

一方、Isles とわざわざ複数形にしているのは、連合王国がグレート＝ブリテン島と北アイルランドからなるからだろう。けれども、連合王国が 4 つのネイションから成り立つことは、あまり強調されなかった。女王入場とともに演奏された「ゴッド・セイヴ・ザ・クィーン」とは別に、「エルサレム」（イングランド）、「ダニー・ボーイ」（北アイルランド）、「フラワー・オブ・スコットランド」（スコットランド）、「ブレッド・オブ・ヘヴン」（ウェールズ）という、4 つのネイションの歌が導入部で紹介されたが、「ブレッド・オブ・ヘヴン」はウェールズ語ではなく英語で歌われた。また、公式サイト（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage3#）によれば、各メイポールには「イングランドのバラ、北アイルランドの麻、スコットランドのアザミ、ウェールズのラッパスイセン」が飾られているというが、このことは NHK の解説でも触れられなかったし、メイポールの映像もロングショットばかりで、会場はもとより、テレビの観客でも気づいた者はあまりいなかったと思われる。

4.2　多様なるブリテン

連合王国内のネイションの「多様性」には消極的だった演出も、民族やジェンダー、年齢のバランス、そして車椅子の出演者や耳の不自由な子どもたちの登場など、「多様性」の積極的な起用は強く意識していた。スタジアムを有する東ロンドンが移民たちの住む多民族地域であること、ロンドンへのオリンピック誘致を成功に導いた要因の一つが「多様性と包含（Diversity and Inclusion）」というマニフェストであったこと（Burdsey2012）を踏まえ、開会式には東ロンドン地区の学校から「50 以上の言語を話す子どもたち」がボランティア・スタッフとして参加していることが公式サイトで紹介されている（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage1）。その他の出演者を見ても、さまざまな属性の人々をステージに集めるよう配慮されていた。とりわけ目をひいたのが、ブルネル一行の中に歴史的にはありえない黒人が含まれていたことと、ステージ 8 の「典型的なブリテン家族」が黒人の父と白人の母の設定であったことである。

4.3　牧歌的ブリテン

ステージ 3 はブリテンの原風景としての田園を表している。公式サイトによれば、ここは「常夏の草原」、「地図にはないが、わたしたちの心の中に存在する楽園」、より具体的には、次の引用にあるように、児童文学に描かれた純真な「子ども」の世界である。

> ここは、昔存在していたとみんなが信じているカントリー・サイド。子どもたちがメイポールの回りで踊り、夏はいつでもお日様に照らされていました。ここは「たのしい川べ」と「クマのプーさん」のブリテン（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage3）。

イングランドの緑なすカントリー・サイドへの憧憬は、実は、そう古いものではない。環境破壊、公害、都市のスラム化、単純労働による人間性の疎外といった問題を産業革命の「影」として捉え、前産業社会の生活や農村風景を理想化する動きが顕著になるのは、連合王国が「ものづくりの国」としての全盛期を過ぎた 19 世紀末のことである。歴史的遺産や景観保全を活動目的とするナショナル・トラストが設立されたのが 1894 年、契機は湖水地方への鉄道建設だった。中世のクラフツマンの手仕事の美を蘇らせようとインテリア・デザインのビジネスを創業したウィリアム・モリスが『ユートピア便り』（1890）で夢想した 21 世紀のロンドンは、産業化以前の自然と共生する街だ。ケネス・グレアムの『たのしい川べ』（1908）や A・A・ミルンの『クマのプーさん』（1926）は、まさに、

このようなポスト産業社会が生み出したノスタルジックな田園ファンタジーである。

人間が、平和で至福に満ちた「黄金時代」から不和と罪で穢れた現在へと堕落したとするシナリオは、古代ギリシャ・ローマのパストラル文学から聖書の「失楽園」に通低するヨーロッパの「大きな物語」だ。実際、このステージの表題となっている「緑なす楽しき大地」の一節を含むウィリアム・ブレイクの原詩（その冒頭部分が合唱曲「エルサレム」である）のテーマも「失われた楽園」である。かつて「神の子羊」たるキリストが歩いたというイングランドの緑の丘が「サタンの暗き工場の群れ（these dark Satanic Mills）」に変わってしまったと嘆く詩人は、続いて、自分に「炎の戦車（Chariot of fire）」を与えれば、立ち込める雲を打ち払い戦い続けるだろう、「イングランドの緑なす楽しき大地に（In England's green and pleasant Land）われらがエルサレムを打ち建てるまで」と歌う。[11]

ステージ 4 に冠された「万魔殿」は、ミルトンの『失楽園』（1667）に登場する、サタンとその眷属の巣食う地獄の都市の名前で、一見すると、失われた「楽園」としてのカントリー・サイドの対極として、産業革命の時代を「地獄」になぞらえているかに思える。けれども、注意深くステージを見ると、演出のボイルの興味深い「読み直し」に気づく。それは、産業化が伝統社会を破壊したのではなく、両者は切れ目なくつながっているという解釈で、ブルネル一行が何の前触れもなく到着した後、村人自身の手で農村風景のセットが片付けられるのと平行して煙突がせり上がり、映画でいうところのディゾルヴのように二つのシーンが重なりながら転換していく趣向にうかがわれる。

ブルネルが朗読した以下のキャリバンの台詞も、この文脈に照らしてみると、産業革命がもたらす「騒音」を恐れることはないと、むしろ「島」にもたらされた変革を歓迎するメッセージとして披露されていることがわかる。

こわがることはない
この島はいつも騒音で一杯だ
音楽、甘い歌の調べ
喜びを与えるが　傷つけはしない
数え切れないほどの弦楽器が
ぶーんぶーん鳴っても
耳のまわりでハミングするだけ
時には声がまじるが
長いことぐっすり眠って目覚めた後でも
また眠くなる、そうして、夢の中で
雲が割れたように思え、宝物が見えて
落ちてくるというところで目が覚めてしまい
もう一度夢が見たくて泣いたものさ
（訳文は筆者）

さらに象徴的なのが、ステージが変わってもスタジアムにそびえたつグラストンベリ・トール（Glastonbury Tor）の模型である（図 2）。グラストンベリ・トールは南イングランドにある高さ 145m の円錐型の丘で、頂上には中世の聖ミカエル教会の尖塔が残っている。ミステリアスな形状もさることながら、瀕死のアーサー王が運ばれたという「アヴァロンの島」と同一視される「パワースポット」である。ふもとのグ

（図 2）開会式より、グラントンベリ・トール（奥）と「緑なす楽しき大地」
(http://www.flickr.com/photos/64781900@N00/7658495182)

ラストンベリ修道院もアーサー伝説ゆかりの地で、12 世紀の記録によれば「アーサーの墓」がかつてあったとされる。

グラストンベリ・トールは、ダニー・ボイル版「ブリテン物語」を神話として見せるための大事な舞台装置である。トールの記号性は、ステージ 3 の説明文「かつてあった、すばらしい生活の思い出と、これから来るすばらしい生活の約束（A reminder and a promise of a once and future better life）」という一文から、『過去と未来の王（*The Once and Future King*）』（1958）という、T・H.・ホワイト作のアーサー王物語への連想を容易にする。[12] その「約束の地」、新しきエルサレムとは、ボイルの言葉によれば次のようなものである。

> あらゆる騒音や喧騒の向こうに見てほしいものがあります。一筋の金の糸—エルサレムの理念—より良い世界、真の自由と平等の世界が続いているのを。その世界を築くのは産業の繁栄と、かつて福祉国家を打ち立てた思いやりの国、活気にあふれたポピュラー・カルチャー、世界をつなぐコミュニケーションという夢です。エルサレムは作れると信じること。そして、それはみんなのために存在することになるのです（And that it will be for everyone）。（http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage1）

4.4 労働者のブリテン

時代の喧騒を超えて、皆が自由で平等な未来を打ち立てるのは誰か？それは労働者である。時代とともに支配層は貴族・大地主から資本家へと交代したが、ボイルの語る「ブリテン物語」の主役は、前産業社会、産業社会、そして現在の IT 社会を一貫して「額に汗して働く人々」であり、彼らが作り出したポピュラー・カルチャーだ。「驚異の島々」で映し出された蛇行するテムズ河のように、「ブリテン」の過去と未来は継続している。

つながっているのは時間だけではない。キャリバンの島はエリザベス朝より植民地化が進んだ西インド諸島の一つとされるが、船からおりたつ移民労働者の集団を舞台上に描き出すことで、世界の入り口たるテムズ河を通じて植民地とブリテンの労働者、さらに各場面に登場するボランティア市民が、手を取り合って国を作る「島の住人」として重なり合う。

5. ロンドン・オリンピック開会式のアイデンティティ・ポリティクス

ロンドンの開会式における「芸術プログラム」は、過去の式典と比して、きわめて異色だった。マスゲームや大群舞などのスペクタクル性は少なく、キルトを着たバグパイプ隊の行進のような、これみよがしの民族色の演出も見られなかった。しいて言えばバルセロナとシドニーの神話的祭典に近かったが、「新しきエルサレム」、ブリテン再生の神話的物語を構成する要素は、外部の者には解読困難なものばかりだった。グラストンベリ・トールを取っても、NHK の解説では名称すら登場しなかったし、仮に紹介されたとしても、その神話的記号性にぴんとくるオーディエンスは限られていただろう。各ステージのタイトルやアトラクションで引用された台詞等のインターテクスチュアリティも明示的なものではない。つまり、日本のアトラクションとして、富士山の模型やカブキ・スモウが登場するような、わかりやすい「ブリティッシュネス」の演出は行われなかったのである。[13]

オリンピズムとの関係で言えば、中国文明の偉大さをこれでもかと見せつけた北京大会でさえオリンピック理念との融和のうちに終幕したのに対し、ロンドンはメイド・イン・ブリテンのオンパレードだった。もちろん、ブリテンは世界が認める産業革命誕生の地であるし、ステージで披露されたロックや映画、ファンタジーなどのポピュラー・カルチャーの大半も国際的に知られたものだ。そういう意味では、オ

リンピックの掲げる「ネイション」を超克した理念へと連なる、創造性や夢、福祉、芸術、進歩などを表していたと言えなくはない。けれども、それらも結局は「ナショナルな」物語の小道具だった。

開花式の「ブリテン物語」が内向きのメッセージに終始した背景には、連合王国が抱える「共同体の危機」という問題が見え隠れする。ロンドンがパリを破ってオリンピック招致に成功したことを賑々しく報じる 2005 年 7 月 6 日の翌日、テレビや新聞はロンドン同時多発テロのニュース一色に変わった。対アフガニスタン・イラク政策でアメリカに同調するブレア政権への抗議として連続テロを企てたのがアルカイダなどではなく、連合王国内で生まれ育ったムスリム教徒だったことが物議をかもした。2011 年夏にも警官による黒人射殺を引き金にロンドンで起こった暴動がイングランド各地に飛び火、原因は人種問題だけではなかったが、これを契機にエスニック・グループへの漠然とした社会不安が広がった（*Guardian*, 5 September 2011）。

保守党や右派が先導する「分断したブリテン」言説は、白人労働者の不満や、9/11 による反ムスリム感情などを背景に欧米で加速するマルティカルチュラリズムへのバックラッシュ (Hewitt 2005; Vertovec and Wessendorf eds. 2010) をも取り込んでいる。マルティカルチュラリズムは、支配的社会層（たとえば白人中流階級）だけでなく、その他の民族・言語・宗教の存在を対等に認め、彼らの文化や習俗を尊重・保全することを表す政治的用語だと一般に解されるが、Kymlicka（2010）によれば、正確には 3 つの種類があるという。第一はオーストラリアやカナダ、合衆国などの先住民に関わるもので、植民者によって剥奪された土地の権利要求などが主要課題である。第二は、連合王国におけるスコットランドやウェールズ、スペインのバスクやカタルーニャなど、マルティ・ナショナルな国家内のマイノリティ・ネイションへの自治や公用語の問題に関わるもの、そして最後が国内のエスニック・マイノリティへの公民権の保証や支援を含むもので、現在、批判の対象となっているのは、移民を対象とした第三のマルティカルチュラリズムであると彼は指摘する。

実際、ロンドン同時多発テロの記念日には、「マルティカルチュラリズム死す」（*Daily Mail*, 7 July 2006）、「マルティカルチュラリズムがブリテンに恐怖を蔓延させる」（*Daily Express*, 7 July 2007）といった見出しが紙面をにぎわす。要は、マルティカルチュラリズムがエスニック集団を市民社会から孤立させ、そこで生まれ育った若者（特にムスリム信徒）が英語も自由主義国の価値観も身につけることのないまま狂信的なテロリストに育っているという主張である。キャメロン保守党党首も、「異なる文化は尊重されなければいけないという理念」は、「ブリテンのアイデンティティの土台を揺るがし」、人種隔離ならぬ「文化的分断（cultural apartheid）」を生み出した（*Daily Mail*, 26 February 2008）など、マルティカルチュラリズム政策を批判して憚らない。

このような流れの中、「マルティカルチュラリズム」に代わって台頭してきたのが、差異を「民族」や「宗教」という単位ではなく「個人」の属性として捉える「多様性（diversity）」というパラダイムであり（Vertovec and Wessendorf eds. 2010: 18f）、政府の施策にも「あらゆるバックグラウンドの若者に教育と社会化の機会を与え、ブリティッシュ・アイデンティティという包括的意識を自らの文化的アイデンティティとともに育てていくこと」（ibid. 20）が盛り込まれた。同様に、Burdsey（2012; 74）によれば、ロンドン・オリンピック組織委員会の言説においても、当初掲げられた「マルティカルチュラリズム」の理念は「多様性」へとすり替わっていった。

ボイルが演出した「ブリティッシュネス」は、以上のような政治的文脈で読み解くべきであろう。4 つのネイションの「連合」としてでもなく、

かつての植民地やアジア、東欧、ムスリム圏などさまざまな民族的ルーツを持った「多民族国家」でもなく、エスニシティも肌の色も、宗教も、身体性も、ひとりひとりの「個性」として尊重される「普通の人々」がグラストンベリ・トールの頂に「すばらしき新世界」を打ち立てるという壮大な夢は、イングランド人とカトリック系アイルランド移民の子として生まれ、労働者階級から大学卒プロフェッショナルにのし上がった、自身がブリテン社会の多様性の包含を体現するがごときボイルが、現代の「分断したブリテン」に捧げた一編の神話なのである。[14]

注

1. オリンピックが世界中でどのくらい視聴されているのかは正確には把握できない。放送地域・局のデータのほかにIOCが公表している指標に総視聴時間（Total Viewer Hours）がある。これは、IOCより放映権を購入して制作された世界各地のオリンピック番組について、番組の長さに視聴者数をかけて算出した番組ごとの視聴時間の総計、いわば、各大会が世界中で視聴された時間数である。IOCの行ったマーケット・リサーチ（IOC 2001, 2004）によれば、2000年のシドニー・オリンピックが361億時間、2004年のアテネ・オリンピックが344億時間だった。2008年の北京大会からは、IOCは、毎分視聴率の平均値（Average Minute Rating）をデータとして採用しているため、総視聴時間の統計はない。
2. 1968年のメキシコ大会についてはデータがないため、グラフには掲載していない。
3. IOCの記述（http://www.olympic.org/antwerp-1920-summer-olympics）による。
4. エスニシティに関する国勢調査はイングランドとウェールズについてのみ行わる。2001年度のデータと2009年時点での推計によれば、非白人人口は数にして250万人、比率にして37.4%増加、6人に一人が非白人という計算である（*The Guardian*, 18 May 2011）。
5. IOCの公式サイト（http://www.olympic.org/）における各大会の記述、および日本オリンピック委員会（監修）『近代オリンピック100年の歩み』（1994）を典拠とし、両者の記述が異なる場合はIOCに従った。
6. Horne and Whannel（2012: 109）はクック諸島を12のうちに入れていないが、ニュージーランドと自由連合の形をとり、国籍はニュージーランドで、国連には加盟していない。一方、二人があげているオランダ領アンティルは、2010年の自治領解体に伴いNOCが消滅した（http://www.olympic.org/national-olympic-committees）。ただし、ロンドンには、今回限定の特別措置として3名のアンティル選手が個人資格で参加した（『朝日新聞』2012年7月28日夕刊10頁）。
7. 聖火点火を行う聖火リレーの最終ランナーを誰が務めるのかも開会式のメディア報道の目玉の一つである。1964年の東京大会で広島の原爆投下の日に生まれた陸上の坂井義則選手が、1996年アトランタ大会では、ベトナム戦争徴兵拒否でヘビー級王座を剥奪された、ローマ大会のボクシング・チャンピオン、モハメド・アリが病気をおして登場し、喝采を浴びた。1976年モントリオールでは、ギリシャからカナダまで聖火を運ぶのに、聖火のエネルギーを電子パルスに変換し衛星でオタワに中継、そこでレーザー光線で再点火してスタジアムへリレー、最終ランナーは10代の男女高校生ペアが務めて話題となった。
8. 以下の開会式の記述は、1984年のロサンゼルス大会組織委員会によって創設されたNPO団体The LA84 FoundationのOfficial Olympic Reportsアーカイヴの公式レポートおよび、Olympic Ceremony Databaseの映像資料による。
9. 「オリンピック憲章」によれば、オリンピズ

は次の 2 点に要約される（IOC 2011: 10）。

1）Olympism is a philosophy of life, exalting and combining in a balanced whole the qualities of body, will and mind. Blending sport with culture and education, Olympism seeks to create a way of life based on the joy of effort, the educational value of good example, social responsibility and respect for universal fundamental ethical principles.

2）The goal of Olympism is to place sport at the service of the harmonious development of humankind, with a view to promoting a peaceful society concerned with the preservation of human dignity.

10. 実際、開会式を見たアボリジニの中には、征服者の欺瞞、「白人のアリバイ作り」という意見もあった（Rowe and Stevenson 2006: 202）。

11. 映画『炎のランナー』の原題 The Chariot of Fire はこのブレイクの詩に由来する。思えばこの映画も、民族的背景や階級の異なる若き陸上選手たちが、ブリテンの栄光のためにチーム GB として団結するという物語である。ボイルはアトラクションの各シーンに「多様性の包含」というテーマをさりげなく配していたというわけだ。

12. グラストンベリ修道院の「縁起」によれば、ここはキリストの弟子たちが建立したイングランド最古の教会で、キリストが顕現し、自分と聖母に捧げたという。前述のブレイクの詩の一文（本文 12 頁参照）は、この伝説に言及したものである。キリスト受難後、アリマタヤのヨセフが最後の晩餐で使われた聖杯をもたらしたとされる聖地でもある（青山 1991：86, 107）。復活する救世主もまた「過去と未来の王」であろう。なお「過去と未来の王」という文言は、トーマス・マロリー作『アーサーの死』（1485）の第 11 巻第 7 章に言及されている、アーサーの墓碑銘 ‘Hic jacet Arthurus, Rex quondam, Rexque futurus’ に由来する。

13. 開会式が「ブリテン人によるブリテン人のためのもの（It was by the Brits and for the Brits）」であり、シェイクスピアの台詞、ブルネルなど、アメリカ人にとってもなじみのないものばかりだったことを映画評論家の Evert (2012) は指摘している。

14.「左翼的マルティカルチュラルなガラクタ（leftie multi-cultural rubbish）とツィートとして顰蹙を浴びた保守党議員が発言を撤回した一幕（*BBC News*, 28 July 2012a）もあったが、メディアの反応を見る限り、開会式の国内での評判はすこぶる上々で（*BBC News*, 28 July 2012b）、ユーモアとウィット、偉人ではなく一般の人々に焦点を当てたところ (London turned down the option to celebrate giants and supermen and power and might and chose instead to celebrate people)、ブリティッシュであることに誇りを感たといった賞賛が見られた。興味深かったのは、式典の裏方であるエンジニアたちの努力について触れ、開会式は「ブリテンのものづくり」の精華を海外に知らしめるものであると記した記事（Harris 2012）に対し、この記事を学校の教材にしてエンジニアを育て、国の経済復興に貢献したいという書き込みがあったことだ。開会式が、「世界一のものづくりの国」と、それを支える技術者・労働者への賞賛として読まれていたことを示す一例である。

参考文献

青山吉信　1991. グラストンベリ修道院　歴史と伝説、山川出版社.

阿部　潔　2008. スポーツの魅惑とメディアの誘惑—身体／国家のカルチュラル・スタディーズ、世界思想社.

エリアーデ、ミルチャ　1969. 聖と俗—宗教的なるものの本質について、風間敏夫訳、法政大学出版局　［Mircea Eliade, *Das Heilige*

und das Profane. Vom Wesen des *Religiösen*, 1957］.

日本オリンピック委員会（監修）1994. 近代オリンピック 100 年の歩み、ベースボールマガジン社.

マカルーン、ジョン・J 1988. 近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論、マカルーン（編）、世界を映す鏡—シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック、光延明洋ほか訳、平凡社、387 − 442［John J. MacAloon ed., *Rite, Drama, Festival, Spectacle: Rehearsals Toward a Theory of Cultural Performance,* 1984］.

Anderson, Benedict 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, revised ed., London: Verso.

BBC News 15 August 2011. England riots: Broken society is top priority ? Cameron http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-14524834［2012 年 9 月 19 日取得］

BBC News 28 July 2012a. Aidan Burley says 'leftie multi-cultural' tweet misunderstood http://www.bbc.co.uk/news/uk-19025518［2012 年 7 月 29 日取得］

BBC News 28 July 2012b. Media reaction to London 2012 Olympic opening ceremony http://www.bbc.co.uk/news/uk-19025686［2012 年 7 月 29 日取得］

Burdsey, Daniel 2012. The Technicolor Olympics? Race, representation and the 2012 London Games, John Sugden and Alan Tomlinson eds., *Watching the Olympics: Politics, power and representation,* Abingdon: Routledge, 69-81.

Daily Express 7 July 2007. Multiculturalism has let terror flourish in Britain http://www.express.co.uk/posts/view/12653/Multiculturalism-has-let-terror-flourish-in-Britain ［2012 年 9 月 19 日取得］

Daily Mail 7July 2006. Multiculturalism is dead, say academics［2012 年 9 月 19 日取得］ http://www.dailymail.co.uk/news/article-394566/Muticulturalism-dead-say-academics.html

Daily Mail 26 February 2008. 'Sharia law will undermine British society,' warns Cameron in attack on multiculturalism［2012 年 9 月 19 日取得］ http://www.dailymail.co.uk/news/article-519090/

Ebert, Robert 2012. Danny Boyle's London Olympics opening ceremony is gob-smacking *Chicago Sun-times,* July 28, 2012［2012 年 7 月 29 日取得］ http://www.suntimes.com/news/otherviews/14057838-452/danny-boyles-london-olympics-opening-ceremony-is-gob-smacking.html

Guardian, 18 May 2011. The ethnic population of England and Wales broken down by local authority［2012 年 7 月 29 日取得］ http://www.guardian.co.uk/news/datablog/2011/may/18/ethnic-population-england-wales

Guardian 5 September 2011. British public are more prejudiced against minorities after riots［2012 年 9 月 19 日取得］ http://www.guardian.co.uk/uk/2011/sep/05/british-public-prejudiced-minorities-riots

Harris, Stephen 2012. Engineering the London 2012 Olympics opening ceremony, 23 August 2012［2012 年 9 月 5 日取得］ http://www.theengineer.co.uk/in-depth/the-big-story/engineering-the-london-2012-olympics-opening-ceremony/1013640.article#ixzz25Z1aHL5v

Hewitt, Roger 2005. *White Backlash and the Politics of Multiculturalism,* Cambridge: Cambridge University Press.

Horne, John and Garry Whannel 2012. *Understanding the Olympics,* Abington:

Routledge.

International Olympic Committee 2001. *Sydney 2000 Olympic Games*: *Global Television Report 31st January 2001* ［2012 年 9 月 5 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/Reports/EN/en_report_567.pdf

International Olympic Committee 2004. *Athens 2000 Olympic Games: Global Television Report December 2004*［2012 年 9 月 5 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/Reports/EN/en_report_1086.pdf

International Olympic Committee 2009.Games of the XXIX Olympiad, *Beijing, 2008: Global Television and Online Media Report*［2012 年 9 月 5 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/IOC_Marketing/Broadcasting/Beijing_2008_Global_Broadcast_Overview.pdf

International Olympic Committee 2011. *Olympic Charter in force as from 8 July 2011* ［2012 年 9 月 8 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/olympic_charter_en.pdf

International Olympic Committee 2012a. *IOC Olympic Marketing Fact File, 2012 edition*［2012 年 9 月 6 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/IOC_Marketing/OLYMPIC-MARKETING-FACT-FILE-2012.pdf

International Olympic Committee 2012b. Factsheet Opening Ceremony of the Games of the Olympiads,［2012 年 9 月 6 日取得］ http://www.olympic.org/Documents/Reference_documents_Factsheets/Opening_ceremony_of_the_Games_of_the_Olympiad.pdf

Kennett, Christopher and Miquel de Moragas 2006. Barcelona 1992: Evaluating the Olympic Legacy, Tomlinson & Young eds., 177-196.

Kymlicka, Will 2010. The rise and fall of multiculturalism?: new debates on inclusion and accommodation in diverse societies, Vertovec, Steven and Susanne Wessendorf eds., 32-49.

Official Olympic Reports: http://www.la84foundation.org/5va/reports_frmst.htm

Official Site of the 2012 London Olympic and Paralympic Games: http://olympicopeningceremony.tumblr.com/tagged/stage1)

Olympic Ceremony Database: http://bryanpinkall.blogspot.jp/2012/07/1992-summer-olympic-opening-ceremony.html#!/2012/06/olympic-ceremony-database-every-summer.html

Rowe, David and Deborah Stevenson 2006. Sydney 2000: Sociality and Spatiality in Global Media Events, Tomlinson & Young eds., 197-214.

Spencer, Richard 2008. London 2012 cannot match Beijing Olympics opening ceremony 'because of trade unions' ［2012 年 9 月 6 日取得］ http://www.telegraph.co.uk/sport/olympics/2617980/London-2012-cannot-match-Beijing-Olympics-opening-ceremony-because-of-trade-unions.html

Sun 3 March 2010. Your fears in Broken Britain ［2012 年 9 月 19 日取得］ http://www.thesun.co.uk/sol/homepage/news/2875771

Tomlinson, Alan & Christopher Young eds. 2006. *National Identity and Global Sports Event: Culture, Politics, and Spectacle in the Olympics and the Football World Cup,* Albany: State University of New York Press.

Vertovec, Steven and Susanne Wessendorf eds. 2010. *The Multiculturalism Backlash: European discourses, policies and practices,* Abingdon: Routledge.

（受付日：2012 年 9 月 24 日）